

中学校地理的分野におけるワンポイント巡検の実践事例

— 神奈川県大和市立渋谷中学校周辺を事例として —

中里 裕昭（神奈川県大和市立渋谷中学校）

松岡 路秀（神奈川県大和市教育委員会）

- 1 対象学年・学級：中学校第1学年、5クラス
- 2 教科・科目：社会科地理的分野
- 3 対象地域：神奈川県大和市立渋谷中学校周辺
- 4 単元名：「身近な地域の調査」（全9時間）
- 5 単元の目標
 - ①ワンポイント巡検で、学区域の台地と低地とでは都市化の進展（時期・土地利用など）にちがいがあ
 - ることに気づく。
 - ②それを大和市全体にまで広げて「大和市の都市化」について調査し、まとめ、発表する。
 - ③都市化の進展にともなう大和市の課題と将来像について考察し、意見交換する。
- 6 単元の指導計画

時	学習内容	学 習 活 動	資 料
①	「身近な地域」の調査方法の学習、ワンポイント巡検の事前指導	<ul style="list-style-type: none"> ・「身近な地域」の調査方法の学習 ・ワンポイント巡検のテーマ・観察方法・諸注意 ・巡検コースの確認、ワークシートの書き方 	ワークシート 地形図
②	地形図学習	<ul style="list-style-type: none"> ・ワンポイント巡検コースを含めた地域で、地図のきまり（縮尺・方位・地図記号・等高線など）について学習する。 	ワークシート 地形図
③ 本時	ワンポイント巡検	<ul style="list-style-type: none"> ・崖の上と崖の下とのちがいを探す。 	ワークシート 地形図
④	ワンポイント巡検の事後学習	<ul style="list-style-type: none"> ・台地と低地の都市化の進展（時期・土地利用など）にちがいがあ ることに気づき、その要因を探る。 	ワークシート ルートマップ 地形図
⑤ — ⑦	「大和市の都市化」を調べ、まとめる	<ul style="list-style-type: none"> ・大和市全体ではどうなっているのか、地域を広げて「大和市の都市化」について、各自がテーマを決めて調査し、まとめる。 ＜テーマ例＞人口の推移、住宅地化、工業の進展、都市化による問題、最近の変化と問題点、今後の課題など 	図書館資料 インターネット
⑧	「大和市の都市化」調査の発表	<ul style="list-style-type: none"> ・各自の調査結果の発表を通して、大和市全体の都市化についての理解を深める。 	
⑨	大和市の将来展望	<ul style="list-style-type: none"> ・都市化の進展にともなう大和市の課題と将来像について考察し、意見交換する。 	

7 ワンポイント巡検（本時）の実践

(1) テーマ・目標

本ワンポイント巡検のテーマは、「崖の上と崖の下とのちがいを探そう。」である。地理的事象でいうと、「都市化の進展—台地と低地のちがい—」ということになる。

本ワンポイント巡検の目標は下記のとおりである。

- ①台地上は畑・果樹園など、低地は水田という、台地と低地の農業的土地利用にちがいがあ
- ることを観察する。
- ②台地上の畑や果樹園は一戸建住宅などに、低地の水田は大型団地や学校などに転用されているとい
- う、台地と低地とでは土地利用の変化にちがいがあ
- ることを観察する。

(2)実践年月日

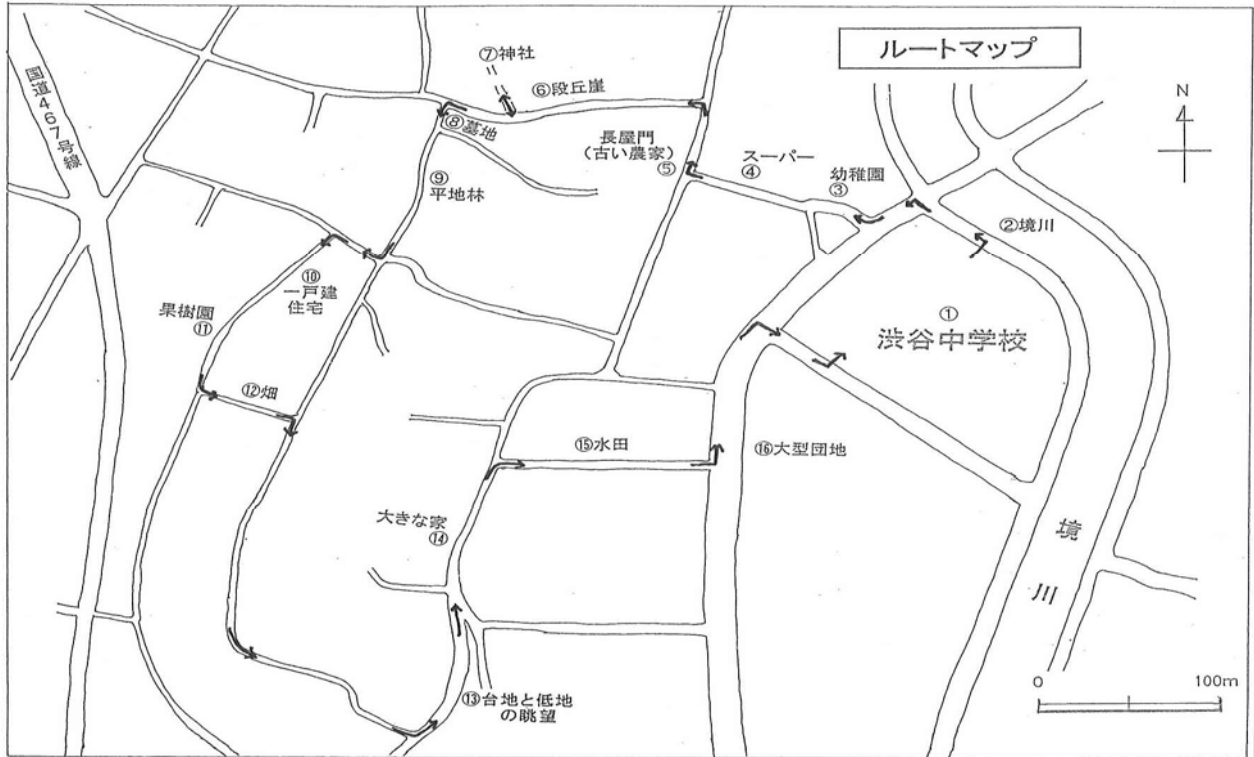
2010年9月22日(1年1組、1年2組)

2010年9月24日(1年3組、1年5組、1年4組)

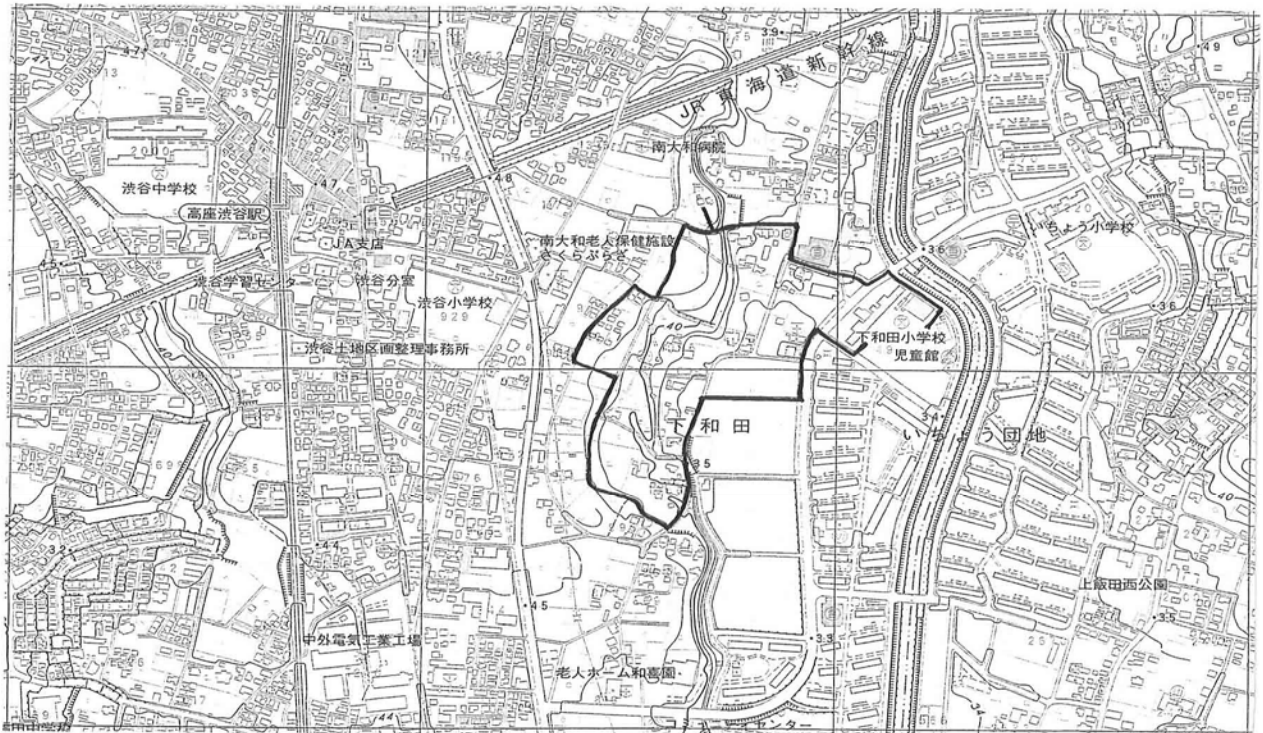
(3)実施形態

1クラス単位で実施し、引率者は授業者と学年の空きの教員の2名と、オブザーバーとして実施計画立案者が参加した。実施時間は、1単位授業時間の50分である。コースは約1,500mで、歩くだけなら20分間位の距離で、30名弱の生徒を引率した巡検であったが、50分以内で終了することができた。

(4)ルートマップ



地形図



(5) 観察方法

コースを歩きながら、「崖の上と崖の下とのちがいが」という観点から、観察したことをワークシート（ルートマップを拡大した白地図、観察ポイント未記入）に記入していった。

(6) 観察ポイントと観察内容

① 渋谷中学校

1947年に開校した渋谷中学校は、もともと小田急江ノ島線高座渋谷駅近くにあったが、1993年からの駅周辺の「渋谷土地区画整理事業」にともない移転することになった。移転先は、2002年3月に統廃合された下和田小学校跡地で、2004年4月に新築移転したものである。

② 境川

境川は、かつての武蔵国（現在の東京都町田市、横浜市など）と相模国（現在の相模原市、大和市など）とを分けると同時に、地形的にみても武蔵野台地と相模原台地を分ける境の河川である。

かつては激しく蛇行しており両岸に沖積低地を形成し、頻繁に洪水をもたらす暴れ川であったが、現在では河川改修により直線化が進んでいる。

③ 幼稚園

1974年に開園した幼稚園で、1973年1月から入居が始まった県営いちよう団地の建設にともなう幼児の増加を見込んだものと考えられる。渋谷中学校の敷地にあった下和田小学校も1974年4月開校していることと合わせると、大型団地の立地に起因していることがわかる。

④ スーパー

食品館と家庭用品館からなるスーパーマーケットで、開店は1979年であるが、土地開発の許可は1974年10月に受けており、大型団地の建設時期と一致しており、団地住民の集客を見込んだものと考えられる。

⑤ 長屋門（古い農家）

長屋門は両側に長屋を備えた門で、封建時代には家格の象徴であり、農村にあつては村役人層などの屋敷に設けられたものである。この農家は江戸時代末には組頭や名主を勤めており、この長屋門の建築年代も江戸時代末期と推定されている。長屋門の残るこの位置から、江戸時代の集落の立地場所を確認することができる。

⑥ 段丘崖

相模原台地上と沖積低地との段丘崖で、地形図から読みとれる標高差は15m位である。生徒たちも坂道を登ることで、低地と台地上の標高差を実感することができる。

⑦ 神社

この神社は「左馬神社」といい、この地域（下和田）の鎮守で、江戸時代には「鯖神社」と記されていた。この事実は、境内にある寛政元年（1789年）の常夜灯に「鯖大明神」と刻まれていることで確認することができる。境川沿いには、「サバ神社」と称する神社が多く存在し、その内の7つのサバ神社を1日で参拝する「七さば参り」は、ほうそう、はしか、百日咳に御利益があるとされる風習が伝えられている。

⑧ 墓地

崖下の集落の墓地で、観察ポイント⑤の長屋門のある農家の墓地もここにある。その農家の初代のお墓には寛永十九年（1642年）と記されており、江戸時代初期ということがわかる。

⑨ 平地林

段丘崖は林で、台地上も開墾されるまでは平地林であり、その名残を確認することができる。

⑩ 一戸建住宅

高度経済成長期以降の都市化の進展にともない、畑の宅地化が進んだ。道の両側の一戸建住宅の建築年を聞き取り調査してみるのもいい。

⑪ 果樹園

大和市南部での台地上のもう一つの農業的土地利用が果樹園である。どんな果樹が栽培されているか、確認させる。農家の人がおられたら、出荷先などを質問してみるのもいい。

⑫ 畑

台地上の土地利用の中心は畑であることがわかる。栽培されている作物を確認させる。かつての台地上は平地林であったが、明治期以降開墾されて、桑畑となった。それも戦後の養蚕の衰退、食糧増産にともない、さつまいも畑となっていった。高度経済成長期以降、作物は近郊農業としての露地野

菜の栽培がさかんになった。農家の人がおられたら、その他の作物、出荷先などを質問してみるのもいい。

⑬台地と低地の眺望

この地点は段丘崖の中腹で、台地上の土地利用を想起しながら、低地の景観を一望することができる。ここで台地と低地の農業的土地利用を確認し、それが都市的土地利用へと変化していていることも確認することができる。

⑭大きな家

かつて農家だった家々が建て替えられたもので、各戸の敷地は広い。古い集落は崖下に立地していた。それは崖下の湧水を飲料水にするためであり、近世の地形と土地利用の関係を想像することができる。

⑮水田

沖積低地の農業的土地利用が水田であるということを実感することができる。この地域は、大和市でも残り数少ない水田がみられる地域である。農家の人がおられたら、品種や出荷先、用水の入手先などを聞き取り調査してみるのもいい。

⑯大型団地

この大型団地は県営のいちよう団地で、横浜市側（いちよう上飯田団地、2,238世帯）と大和市側（いちよう下和田団地）に分布している。いちよう下和田団地は、1973年1月から入居が開始され、5階建が29棟、12階建が2棟で、1,392世帯が入居した。

7) 実践の結果

今回のワンポイント巡検は、テーマが「崖の上と崖の下とのちがいを探そう。」ということでなので、ワークシートは当初観察ポイント未記入のルートマップを拡大しただけの白地図を使用した。下のワークシートが、1日目のある生徒が作成したワークシートである。1日目の2クラスの巡検の途中で、「自分が今いる場所が、ルートマップ上のどこかわかりますか。」という質問に対して、半数近くの生徒が「わからない。」という状況であった。ルートマップの裏にコースを記入した1万分の1の地形図を掲載しておいたが、道路に矢印だけを記入したルートマップでは、目印になるものが何もなく、自分の現在位置を確認することが難しかったようである。そこで、2日目からはルートマップの道順の曲がり角に通し番号を入れて、時々その番号で現在位置を確認しながら巡検すると、地図上の迷子はいなくなった。次項のワークシート

<1日目の生徒が記入したワークシート>



< 2日目の生徒が記入したワークシート >



が、2日目のある生徒が作成したワークシートである。

ワンポイント巡検の効果、事前・事後のアンケート調査によって、地理的観察力²⁾という観点から確認した。事前調査では「学校の周りで、①どのようなものが、②どこに、③なぜそこにあるか、というような点について、あなたが知っていること、興味・関心のあることをいくつか書き出してください。」、ワンポイント巡検実施後の事後調査では「巡検を終えて、巡検地域で、①どのようなものが、②どこに、③なぜそこにあるか、というような点について、あなたが気づいたことを、いくつか書き出してください。」というアンケート調査を、実施した5クラス全員に行った。その中の2クラス分、59名が事前調査・事後調査で記述した事項をすべて書き出し、素朴的直観観察・比較観察・相関観察のレベルに分類した

人数と事象数が右の表である。事前調査では、まず「団地がある。」「田んぼがある。」「川がある。」「幼稚園がある。」「スーパーがある。」「神社がある。」など事物の名称を答えるという素朴的直観観察のレベルの回答を記入している者が延べ17名(24.6%)で、92事象の記述があった。最も多かったのは「学校の周りに団地がある。」「学校の近くに田んぼがある。」「学校の近くに幼稚園がある。」

		事前調査	事後調査
素朴的直観 観察レベル	記述者数	17名	3名
	記述事象数	92事象	7事象
比較観察 レベル	記述者数	49名	14名
	記述事象数	278事象	50事象
相関観察 レベル	記述者数	3名	54名
	記述事象数	7事象	259事象
総数	記述者数	69名	71名
	記述事象数	377事象	316事象

(記述者数は、延べ人数である。)

「幼稚園のそばにスーパーがある。」といった比較観察のレベルの回答を記入した者が延べ49名(71.0%)で、

278事象の記述があった。これは質問項目にある①どのようなものが、②どこにあるかに答えたただけのもので、比較観察といっても低位のレベルであり、「崖の上には果樹園があり、崖の下には田んぼがある。」というような比較観察は巡検後でないと回答として現れてこない。ただし、学校の周辺で日々生活している身近な地域だけあって、「坂の隣の林の中に墓がある。」「坂を下りたところにおやしき(ながやみみたいなもの)がある。」など、これからの巡検で観察しようとしているかなり細かいところまで認識している生徒もいた。質問項目の③なぜそこにあるかまで答えた相関観察のレベルの回答(例えば「スーパーがあるのは、近くに団地があるから。)」を記入した者は3名(4.4%)で、7事象の記述があった。事前調査で記述したのは延べ人数69名で、総事象数は377事象であった。この授業の前時に学校周辺を含む大和市の地形図学習をしているにもかかわらず、ほとんどすべてが比較観察のレベルまでということになる。

それがワンポイント巡検を終えての事後調査では、素朴的直観観察のレベルの回答を記入した者は3

名（4.2%）で、7事象の記述があった。比較観察のレベルの回答を記入した者は14名（19.7%）で、50事象の記述があった。それに対して、相関観察のレベルの回答を記入した者は54名（76.1%）＜その内、相関をすべて誤認したものは4名＞で、259事象の記述があった。相関観察の回答例としては、「田んぼが崖下にあるのは、川があるから、水を引きやすいから、土地が平らだから」「崖の上に畑や果樹園が多いのは、日当たりがよいから、水をあまり使わないから、」「スーパーや幼稚園があるのは、近くに団地があるから、団地の人が行きやすいから」といったように、事象間の関連性を理解して答えている。中には「幼稚園が1974年にできたのは、団地（1973年から入居）の小さな子を通わせたいからできた。」というように、巡検時の説明を生かした回答もあった。事後調査で記述したのは延べ人数71名で、総事象数は316事象であった。

事前・事後の調査結果を記述された総事象数で比較してみると、事前調査では377事象であったのに対して、事後調査では316事象へと量的には16.2%減少している。これは事前調査では素朴的直観観察と比較観察レベルの記述事象が95.6%とほとんどであり、「何があるか。」と「何がどこにあるか。」だけに答えたのもので、知っていることをできるだけ数多く記述したものと推測される。それに対して事後調査では相関観察レベルの記述事象が大幅に増加して76.1%を占めており、「なぜそこにあるのか。」までを考えて記述しなければならず、数的に減少したものと考えられる。一方、質的な面を観察レベルの記述者数から比較してみると、ワンポイント巡検を行うことによって、素朴的直観観察レベルの回答した者は82.4%、比較観察レベルの回答した者は71.4%も減少している。それに対して、相関観察レベルの回答をした者は18倍にも増加している。相関観察レベルの記述者数が増加しているということからも、わずか1単位時間のワンポイント巡検を実施するだけでも、地理的観察力が格段と向上するといえる。

（8） 今後の課題

地理教育巡検の意義・価値を検証するという観点からは、今回の実践では地理的観察力にしばって考察した。巡検をすることによって、生徒の地理的観察力が向上するということは前述のとおりであるが、地理教育巡検には他にもいくつかの意義・価値があげられている³⁾。生徒の好奇心・探求心を呼び起こし、学習意欲を喚起することができる。」ということに関しては、実施時期が9月末であり、水田は収穫時期を迎えていた。収穫後の田んぼでは切り株から水田の地図記号の成り立ちを実感したり、落ちていた稲穂から粃を1粒ずつ生徒に渡すと、手で粃殻を取った玄米を食べて、歓声をあげている生徒もいた。これらのことは、生徒の好奇心・探求心を呼び起こすには十分な出来事であり、学習意欲を喚起することができたものといえる。「野外において事象を直接的に観察・体験することにより、地理的事象についての価値ある理解ができる。」ということに関しては、崖の坂を上って台地上は畑・果樹園であり、崖の坂道を下って低地は水田であるということを実際に歩くことによって実感的に理解している。そのことを生徒が記述した項目から確認してみると、「田んぼをつくるには広い土地が必要だから崖下にある。」とか、「果樹園が崖上にあるのは、日当たりがよく、斜面が坂になっていて、果物を育てるのに良いから。」などの回答がみられ、「崖の上と崖の下のちがいは」ということについての相関観察につながったものといえる。また、「スーパーが2棟に分かれているのは、1棟の上がマンションになっているから。」とか、「同じ名字のお墓が多いのは、周りにその名字の家が多いから。」とか、あまり正しい分析ではないが「森の中のお墓は、暗いからお墓がそこにある。」などの回答は、実際に巡検で現地に行ってみて、実感しないと出てこない意見である。これが巡検することの一番の意義や価値なのである。「読図力の養成」や「資料活用能力の育成」に関しては、今回十分な考察ができなかったため、今後の実践で検討していきたい。

注

- 1) 佐島群巳氏の観察力の分類を参照する。（佐島群巳：「子供の野外観察における観察力の実態とその発達段階」、新地理第11巻第4号、pp.46-63、1963.3.）
- 2) 松岡路秀：「地理教育における巡検学習論の構築とワンポイント巡検の提唱」、地理教育研究第7号、pp.1-7、2010.11.

<地理教育巡検研究委員会からのコメント>

この実践事例はアンケート調査をして報告しているが、これはあくまでもサンプルであり、必ずしも実践報告にアンケート調査が必要ではなく、感想程度でまとめることでもかまわない。